

## 博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 栗田博之



学位申請者 辛嶋博善

論文名 「衝突する未来—ポスト社会主義期におけるモンゴル国ヘンティール郡の牧畜社会を事例として」

### 論文の概要

辛嶋博善氏の博士学位申請論文「衝突する未来—ポスト社会主義期におけるモンゴル国ヘンティール郡の牧畜社会を事例として」は、モンゴル国ヘンティール郡ムルン郡を中心に行われた長期間のフィールドワークに基づき、ポスト社会主義期におけるモンゴル国の牧畜社会を文化人類学的に記述・分析した民族誌的研究である。フィールドワークは2003年から2010年にかけて断続的に実施され、その期間は計13ヶ月に及ぶ。長期間の綿密な現地調査に基づき、ポスト社会主義期における牧畜社会の実態が精密に描き出されており、ポスト社会主義期を、フォーマルなルールとともに主体の意図が変化を方向付ける「不確かな移行」として捉え、同時に、それを単なる社会主義体制崩壊直後に見られたようなショック療法に起因する混乱と旧来の制度の復活・再生としてではなく、個々人が思い描いた未来を実現しようとして行く意図によって更なる変化を引き起こされている「第二の大転換」として位置付ける事によって、その動態を「現在になりつつある未来」として明らかにしている。

### 論文の内容

第1章では、モンゴル国の牧畜社会におけるポスト社会主義期を「第二の大転換」として位置付けるための基本的な視座が示される。ポスト社会主義期を対象とした文化人類学的研究の概観が行われ後、モンゴル国の牧畜社会におけるポスト社会主義期を制度変化として捉える事の妥当性が示され、新制度派経済学の視点からの制度変化のメカニズムが提示される。そして、収穫逦増し得る家畜による生産力と、取引費用を必要とする市場での取引を背景として、未来を実現しようとする牧民のアントレプレナーシップにより制度変化が引き起こされる可能性が示される。

第2章では、分析の対象であるモンゴル牧畜社会について、社会主義体制下の状況とその崩壊後の人口移動、行政単位と行政区画の変更、協同組合の成立過程等を中心に、その歴史的変遷の概観が提示される。また、モンゴル国ヘンティール郡ムルン郡第1村及び調査

世帯について、その概要が示される。

第3章では、牧畜の年間のサイクルに基づき、調査地における牧畜についての詳細な民族誌的記述が行われる。そして、協同組合期に生産の末端に位置付けられ、協同組合の生産計画に沿った周期的な時間の中で活動していた牧民たちが、協同組合の消滅と天候不順の経験を経て、自然環境の変化に翻弄されながらも、土地に関するフォーマルな制度変化に柔軟に対応し、状況に応じて適宜調整を施しつつ、季節的移動や宿営地の選択、また家畜の管理に携わっていく姿が描き出される。

第4章では、家畜の生産性と家畜生産物の問題が取り上げられる。牧民は無計画に家畜を処分する事も、無制限に家畜を増やす事も出来ないが、畜群を再生産しながら、家畜を直接食料として消費するとともに、その生産物の一部を市場に流通させる事によって、現金収入を得ることが可能である。家畜と家畜生産物の生産と売却によって、牧民が生計を維持する以上の収益を生み出し、収穫増が可能である事が示される。

第5章では、家畜と家畜生産物の市場への売却を事例として、取引費用の問題が取り上げられる。ポスト社会主義期のモンゴルにおいては、物不足とインフレ、治安の悪化、信頼関係の崩壊等によって取引費用は高騰した。取引費用を引き下げるフォーマルなルールは存在しないが、牧民は高騰した取引費用をそのまま受け容れるのではなく、自家用車の購入、信頼し得る商人との顔の見える関係の構築等を通じて、自ら取引費用を引き下げるための試みが行われている事が示される。

第6章では、制度変化が引き起こした時間への意識の変化をフィードバックすることによって、牧民が作り出そうとする「未来」とその相克が述べられる。家畜の生産性と取引費用の引き下げによって、牧畜社会は制度変化のための経済的条件を整えつつあり、それを背景として、牧民は時間認識を変更し、新たな「未来」を企図するようになった。草原で生活を送って来た牧民は、家畜を所有したまま、社会主義体制の崩壊を契機として草原に流入して来た少年牧夫に畜群を管理させて、自らは都市へ移住しようとするのである。一方、牧夫は自らの家畜を手に入れ、結婚して、独立を果そうとする。ここでは、この二つの「未来」が衝突する様子が描き出される。

第7章では、本論文の結論、本論文の限界と残された課題が述べられる。ポスト社会主義期のモンゴル国の牧畜社会において、都市へ移住しようとする自営の牧民たちも、家畜を手に入れ独立する事を目論んでいる牧夫たちも、畜群の拡大と生産物の売却によって新たな「未来」を具現化しつつあったが、自営の牧民たちの「未来」と牧夫たちの「未来」が衝突し、膠着した状態にある事、この状態は、牧畜社会と都市や国家との対立から生まれたというよりも、むしろこれまでの牧畜社会の歴史の中で見られた事象を背景としつつ出現したものであるという事が結論として述べられる。そして、本論文で取り上げた事例の今後の展開、新たに「現在になりつつある未来」を民族誌として描く事を今後の課題として、論文は締め括られる。

## 論文の評価

1991年のソ連解体以降、ソ連型社会主義を歴史的に経験した東欧・モンゴル等を含む旧ソ連地域における文化人類学的研究が本格化した。これらの地域に関しては、社会主

義体制が終焉を迎えるまで、外国人が人類学的現地調査を実施する事は極めて困難であったが、90年代以降、世界中の数多くの人類学者が旧ソ連圏で現地調査を実施し、「ポスト社会主義民族誌」を続々と発表するようになった。そして、今や「ポスト社会主義人類学」が文化人類学の新たなジャンルとして定着しつつあるとさえ言えよう。人類学的研究を進める上で社会主義体制下で公表されて来た「公定の」民族誌や民俗誌しか利用出来なかった状況が一気に改善されたばかりでなく、社会主義を一つの大きな「社会実験」として捉え、制度移行下で社会主義という歴史的経験を内在化させた人々の生活がいかに営まれているかを解明する事が強く期待されている。以上のような背景の下、本論文はモンゴルの牧畜社会を対象とした「ポスト社会主義人類学」的研究の成果として、極めて手堅い論理構成の下、人類学的な「厚い」記述に満ちた、優れた民族誌となっており、近年話題となっている「ポスト社会主義民族誌」と比較しても、それと同等以上の高い水準にあると言える。

「ポスト社会主義民族誌」に対しては、時に、単に過渡期的現象を記述しているに過ぎないのではないかという疑念が呈される事がある。実際、ポスト社会主義社会の「未来」がどのような形を取るのか、予測する事は大変に困難であり、本論文に対して、「一過的な現象を記述しているに過ぎない」と批判する事も可能であろう。しかし、逆に、安定した「未来」が到来するという保障も一切存在しないのである。「未来」は人々によって作られるという基本認識の下、「現在になりつつある未来」を描き出そうとした試みは十分に成功していると言えよう。

## 公開審査の概要

公開審査は2011年6月3日（金）に行われた。冒頭で辛嶋博善氏による論文の概要説明がなされた後、審査委員との間での質疑応答に入った。以下がその概要である。

まず、本論文の学術的貢献に関しては、審査委員から次のような高い評価が寄せられた。

第一に、遊牧移動と土地利用の点から牧畜の1年のサイクルを扱った第3章は、長期間のフィールドワークに基づき、モンゴルにおける牧畜のサイクルが具体的かつ詳細に描き出されており、この章を単独で取り出したとしても、民族誌として十分に通用する程完成度が高いものとなっている。生態人類学的な観点から見ても、豊富なデータが盛り込まれており、特に、畜群の管理に関する記述は秀逸である。また、季節変化、気候変化、制度変化等に人々が柔軟に対応している姿が具体的に描かれており、牧畜社会の柔軟性が分かりやすい形で伝わって来る。但し、この章が他の章に比べ量的にも突出しているため、残念ながら、論文全体のバランスが崩れてしまっているという意見が複数の審査委員から出された。

第二に、ポスト社会主義期の牧畜社会に出現した、都市部に移住する不在家畜主の誕生と自らの家畜を所有しない牧夫の誕生という大変に興味深い現象を二つの「未来」の「衝突」という枠組で分析している点が独創的である。また、この現象の背景にある収穫逓増し得る家畜による生産力と取引費用を必要とする市場での取引をノースの議論を援用しながら分析しており、強い説得力を持っている。但し、上記の通り、第3章に比べ、家畜の生産力を扱った第4章、市場取引を扱った第5章、都市への移住と牧夫の誕生を扱った第

6章の記述が量的に少なくなってしまうため、ポスト社会主義民族誌としては、第4章以降をより詳しく書き込んで欲しかったという要望が複数の審査委員から出された。

以上のような積極的評価はすべての審査委員に共通するものであったが、論文全体のバランスの問題以外にも、幾つかの問題点も指摘された。

第一に、論文の冒頭で「周期的時間を抽出して民族誌として提示すること」が目的ではないと宣言し、第3章でも「周期性の疑い」を議論しているが、牧畜という生業形態が持つ本来的な周期性を捨象して、それを直接「時代の変動」と接合する事にはやはり無理があるという点が指摘された。ポスト社会主義民族誌は明らかにこの「時代の変動」を前提に描かれるものであり、第4章以降で取り上げられる「時間意識」はポスト社会主義期に特有のものであろうが、第3章で描き出された牧畜という生業形態に特有の「時間意識」をそれと同次元で扱う事は原理的に困難であり、二つの「時間意識」を同次元にあるものとして接合するのではなく、人々がどのような形でこの二つの折り合いを付けているかを明らかにすべきであろう。

第二に、「時代の変動」を扱っているのであるから、社会主義体制下の協同組合に対し人々がどのように評価しているかについても、より詳細な調査が必要だったのではないかという点が指摘された。特に、調査地が都市部に近く、牧草も豊富で、大家畜所有者の多い地域であり、人々は市場取引の導入にうまく対応する事が出来たため、市場取引の導入以降の状況ばかりに焦点が当てられているが、「衝突する未来」以外にも、他の地域でしばしば見られる社会主義時代の利点を積極的に評価するような動きについても視野に入れるべきであろうという意見が出された。この点については、今後の更なる広範な調査が必要となろう。

第三に、家畜を所有しない牧夫の「未来」と都市部に移住する不在家畜主の「未来」が衝突するという枠組みは、何ならかの形で家畜を所有するようになった牧夫が独立してしまう可能性があるという点では十分に理解可能であるが、家畜や牧草地といった資源の奪い合いは存在せず、家畜の生産力による収穫増が可能であるとすれば、一時的な「衝突」に過ぎないのではないかと指摘があった。更に、独立した牧夫が畜群を拡大し、都市部に移住する不在家畜主となる可能性を考えれば、異なったライフ・ステージにある者の間の利害の衝突であって、両者は同じ「未来」を指向しているという可能性も考えられる。今後、継続的な調査を行い、「未来が衝突」し続けるかどうかを吟味する必要があるだろう。

この他にも、飼料確保のための草刈り、養子制度、モラル・エコノミー論の適用の可能性等に関して質問があったが、上記の指摘も含め、辛嶋博善氏からは明晰な応答があり、これらのコメント等を踏まえた上で更に研究を深化させて行きたい旨の発言があった。実際、これらの指摘は本論文の内容をより精緻なものにするための前向きなコメントであり、本論文の価値が低下するものではないという点で、すべての審査委員の意見は一致した。

#### 論文審査及び最終試験の結果

本論文は長期間のフィールドワークを通して得られた詳細なデータに基づき、ポスト社会主義におけるモンゴルの牧畜社会に関する質の高い民族誌であり、同時に、時間意識に焦点を当てながら、クリフォードの言う「現在になりつつある未来」を描き出そうと試み

た野心的な研究である。ポスト社会主義民族誌として、多くの具体的な事例を交えながら、綿密な参与観察、聞き取り調査に基づいた着実な研究成果であり、将来的な発展も十分に期待出来るとの観点から総合的に判断して、審査委員会は全員一致で、本論文が博士（学術）の学位を授与するに値するものであるとの結論に達した。